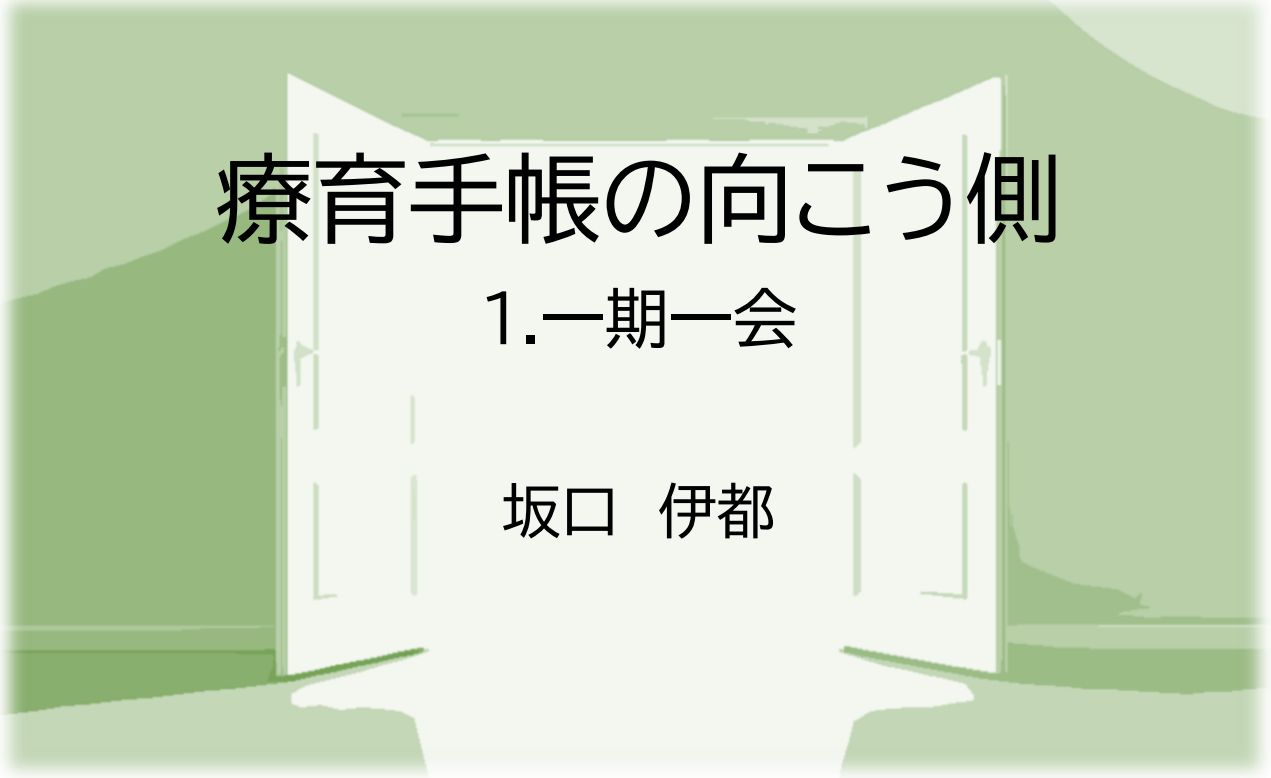




療育手帳の向こう側

1. 一期一会

坂口 伊都

はじめに

家族の話をしよう。あなたにとって、家族はどのような存在ですか。自分と切っても切れ離せないものの一つが家族ではないでしょうか。家族について思うことは誰にでもあります、それを真剣に誰かと語り合う機会は意外とありません。

また、学校、病院、施設等のケース検討では、トラブルの内容やクライアントの行動問題の話は出てきますが、家族がどのような営みで生活をしているかについては、そこに意識を持って聞かないと話題にあがらないまま終わってしまうことがあります。私は、ファミリーセラピストを生業にしているので、家族の営みに関心があります。まずは家族の話を聞かせていただいてから、一緒に考えるので、トラブルの話ばかりだとクライアントの断片しか見えず困惑します。その人の全体像を知りたければ、家族の話は欠かせません。

この連載では、療育手帳に焦点をあて、家族のことを考えていきたいと思います。療育手帳判定の場合では、当事者に目がいいますが、他の家族にも笑顔や悲しみがあり、その子が家族の営みの中で成長してきたとわかります。

では、まず療育手帳について説明します。療育手帳は知的しょうがいがあると判定された方に交付されるものです。発達しょうがいがあると知的しょうがいがある場合は療育手帳に該当しますが、発達しょうがいがあり、知的しょうがい認められない場合、療育手帳は非該当となります。その場合の手帳は、精神保健福祉手帳になります。

療育手帳の運営は全国統一ではなく、自治体事に判断基準が定められているため、療育手帳が交付

される範囲が自治体によって若干の違いがあり、名称も愛の手帳やみどりの手帳と呼ばれている所もあります。療育手帳は、知的しょうがいにより、その人が必要な援助を受けやすくしていくことを目的としており、保育所の加配の先生を依頼する、療育を受ける、支援学級や支援学校に通う、放課後等デイサービスの利用、しょうがい者枠の就職等の支援があります。ハンディキャップ部分の支援を意識し、伝え方を工夫する等で、意思疎通がしやすくなり、社会の中での生きやすさに繋がっていきます。

家族の中に知的しょうがいの者がいると、その人のことだけに対人援助職の関心が向かいやすくなりますが、家族は誰か一人を中心に回っているわけではありません。それぞれの家族の物語がそこにあります。だから、いつでも、家族の話を大切にしたいのです。

Door to Door

療育手帳の判定に出かける日は、いつもとは違う日です。親子共に馴染みのない場所や人に出逢う場です。私がドアを開けると、馴染みのない場所に知らない大人が入ってきて、大抵の子どもに緊張が走ります。顔を背けて親の後ろに隠れたり、親の顔をじっと見たりと、不安気な様子を見せます。この不安が助長される時に、親子関係がよく見えてきます。

私はまず、子どもの様子を見てから、子どもに声をかけます。

「知らない人が入ってきて、びっくりしたね。ごめんね」

「緊張するね」

「こんにちは」

親の反応は、私の言葉を受けクスッと笑いながら子どもの頭を撫でる人や

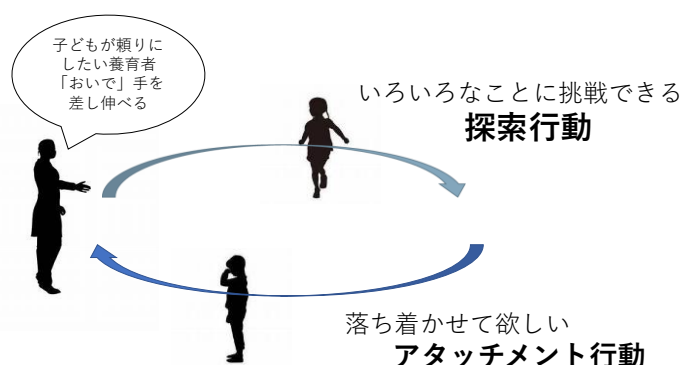
「挨拶は？」と子どもに礼儀を教えようとする人もいます。

子どもの不安を落ち着けてることを先にすると、挨拶もスムーズになりますが、順番が逆になると、子どもが上手く挨拶することができません。

アタッチメントシステムを知っていれば、容易に見えてきます。

アタッチメントは、日本では「愛着」という言葉で使われていることが多いですが、愛という言葉があることで、愛情の有無と勘違いされやすいですが、それは違います。アタッチとは、くっつくという意味で、人は誰でも不安になると誰かにくっついて安心

したくなる欲求を持っています。大人でも、真っ暗なお化け屋敷に入ったら恐怖心を和らげるために



一緒にいる人にしがみつきたくなります。子どもは、小さくて一人で生きのびる力がなく、大人に守ってもらう必要があります。衣食住を提供しても、子どもの情緒が育まれるわけではありません。不安や恐怖心等のネガティブな感情を養育者にくっついてなだめてもらい落ち着く(アタッチメント行動)、安心出来たら外の世界に関心を持ってチャレンジできる(探索行動)ことを繰り返していきます。このアタッチメントシステムが機能することで、情緒の安定につながります。落ち着かせてもらう体験を重ねると何か起きて、守られるイメージができ、自身の存在を肯定できるようになると言われています。

アタッチメントシステムは、発達しょうがいを持つ子どもには当てはまらないのではないかと、子どもの行動を見てもわかりにくいという声をよく聞きます。「親を求めているのかどうかわからない」と悲しげに話されている時、子どもが親を目で追っていたり、親に触れようと手を出して引っ込めている様子が私の方からは見えます。

親の服を子どもが掴んでくれたらわかりやすいですが、その手前で手を引っ込めてしまう時は、
「今、お母さんの方に手を伸ばしていましたよ」
と伝えると、
「えっ、そうなんですか」と驚かれて、嬉しそうな顔に変わります。

発達しょうがいの子どもも不安を感じた時は、頼れる親のそばに行こうとします。中には、発達検査の途中で、親がいる部屋に戻ってくる子もいます。発達検査をするのが嫌という面もありますが、それ以上に新奇場面に不安を感じて戻ってきているように見えます。

子どもが不安を感じた時に信頼できる養育者にくっつきに行くには、養育者が「おいで」と手を差し向けることが重要です。子どもは、くっつきに行ってもいいのかわかっています。手を子どもに差し向けるのは、来ていいよというサインです。大人の方は、意識せずにそれをしていることが多いのではないのでしょうか。何気ない行動ですが、とても大切なことです。

発達検査を終えて親が待つ部屋の戻る時は、場所や人にも慣れてリラックスして帰ってきます。
「よく頑張ったね」と声をかけられると、満面の笑みになったり、ドヤ顔をする子もいます。

親の方も子どもを褒められて嬉しそうにしていると、その空気が子どもに伝わって、かわいい表情を見せてくれます。

家族の話し

親が子どもの話をする時、どの言葉を使うかで印象が変わります。子どもの日常の様子を聞くと、あれも、これもできないという下りによく出会います。同じ年齢の子どもと比べて我が子は幼い、遅れていると言うその言葉の奥には期待、願い、不安等いろいろな感情が含まれていることが伝わってきます。

できる、できないという「ものさし」を隣に置いて耳を傾けていると、

支援学校に通うようになってからは、嫌がらずに行くようになったと聞くことがあります。

「支援学校での様子はいかがですか？」と尋ねると、

「そうですね、担任の先生と気が合うみたいで」

「それは、いいご縁があって、本当に嬉しいです」

「はい、良かったです」と安堵した顔をします。

学校に行けない我が子を心配し、苦悩していた頃を思い出しているようです。

「前の学校では、起きられなくて、お腹も痛くなるし吐くこともあって大変でした」

「そうだったのですね。元気な顔で学校に行くようになってホッとしますね。お父さんと相談して、支援学校に行くことを決めたのですか？」

「はい、一緒に見学に行って、話も聞いてもらいました」

両親と一緒に子どものことを考えてきたのだと伝わります。対面だと、口調や目線、身体の動きなどで、その方の心情が伝わってきます。話に力がこもってきたり、饒舌になったりすると、この人は誰かに自分のことや家族の話聞いてもらいたいのだと感じます。

療育手帳の判定に来るまでに幾つもの壁にぶつかって突破した家族の歴史があるのでしょうか。取り乱す人にであったことはありません。

時には、「療育手帳を取るように言われたから来た。療育手帳ってどういうものですか？」と質問されることもあり、発達指数の数値の意味合いを説明させてもらうことがあります。

「療育手帳は一度とったらずっと持ち続けるものなのですか？」

「更新時期があり、その時に発達検査と聞き取りをさせていただいて、療育手帳が出るかどうか決まります。先のことはわかりませんが、お子さんの特徴を周りの人に理解してもらって、わかりやすく伝えもらえるようになることは大切なことだと思います。」

「療育手帳って、そういうものなのですね。誰もそんな風に教えてくれなくてわかりませんでした。」

と言われると、療育手帳の役割や意味は、対人援助職にもよく知られていないものかも知れないと感じます。療育手帳を通して、子ども自身を支える方向性が見えてきたり、ほんの少しの時間でも、家族のことを話して気持ちが整理されていったら、それは家族の力が増すことになるのではないかと感じます。

